

八木重吉、藤沢周平にみる

明治・大正・昭和の結核との闘い



2010年3月16日 三水会

野口幹夫

今回、明治・大正・昭和 100 年にわたる今は過ぎ去った人間と結核との闘いを描こうと考えました。その端緒は私の住む茅ヶ崎ゆかりの詩人八木重吉と、縁があって親しく調べる必要があったからです。彼は結核によって無念の生涯を閉じるのですが、若い時ならではの美しい詩を生んでいきました。

彼ら累々たる若い犠牲の上に、今長寿の世界が広がったのですが、若くても、あるいは若さのゆえに生み出せた質の高い仕事と、長寿によって得られる人間精神の成熟とは内容が違うのではないかと気がつきました。この報告は結核との闘いによって人間が初めて到達した自然寿命への道程を見たことの人類史的な意味を探ります。

1、八木重吉という詩人

1-1 その生涯と詩

茅ヶ崎の小さな美術館への道の傍らに八木重吉の詩碑があります。

蟲

虫が鳴いてる

いま ないておかなければ

もう駄目だというふうに鳴いてる

しぜんと

涙がさそわれる



重吉は戦前茅ヶ崎にあった結核療養所南湖院で亡くなったために茅ヶ崎ゆかりの人とされています。故郷は八王子に近い相模の相原で、いまその生家の土蔵は記念館になっています。

ます。

そこには彼の絶唱ともいえる「琴はしづかに鳴りいだすだろう」の句碑があります。表紙に載せましたのでご覧ください。

重吉は 1898 年（明治 31 年）生まれ。家は農蚕。豊かではありませんが、

村では有力な家系でした。重吉は小学校から特段に成績がよく、学費のかからない師範学校にはいり、23歳で御影師範学校の教職に就きました。特に英語の成績が良かったといえます。キリスト教信仰も詩作も師範学校時代から始まっています。家庭教師をしたことから知り合った登美子に熱愛し、1922年結婚。神戸須磨で、その後千葉の柏で幸せな新婚生活を送りました。このころから不幸なことに結核に冒されました。本人は結核とはまだ分かっていなかったのです。1923年ごろの作品にそれをしめす次のようなものがあります。

にがいものがながれている

三十七度何分という

めだたなくせにうすきみのわるい

おもくるしいものがながれている



八木重吉(27歳)、とみ子(20歳)、桃子(2歳) 大正13年5月(數え年)

微熱が続くのは結核の活動期です。レントゲン検査や喀痰検査をすれば、病院に収容されてもおかしくない病状だったでしょう。しかしこのよう薄気味の悪いものといっているのは、ただならぬものとは感じてはいても、死病と恐れられている結核とは思いたくなかったのでしょう。

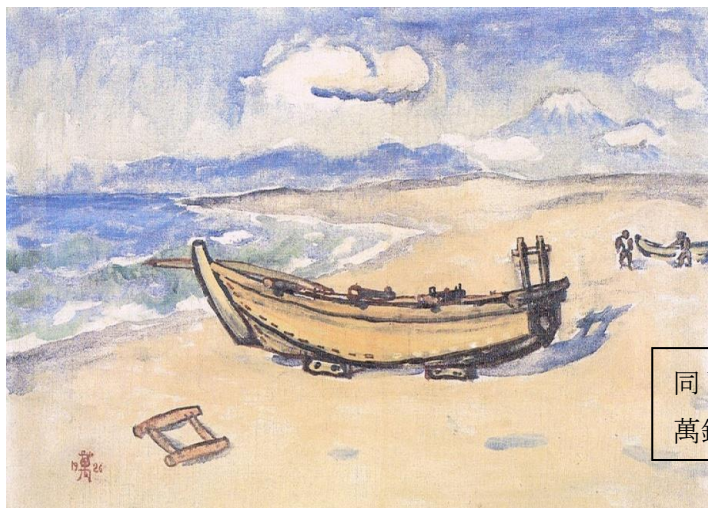
しかし病状がすすみ、はっきり結核と診断されたのはそれから2年後の大正15年3月、もうすでに直

ちに入院を迫られる状況だったのです。5月に南湖院の9号棟に入院、2ヶ月の入院生活後退院します。それは良くなったからではなく、経済的な必要からでしょう。この2ヶ月の南湖院入院には250円はかかりました。当時の小学校教員初任給は20円、漱石が大学教授をやめて朝日新聞社に入社した時の月給200円は破格の待遇と言われた時代です。英語教師として比較的恵まれていたとしても給料取りにとって1日3～4円の入院料は大変です。蓄えもすぐ潰えたことでしょう。実家からの支援を仰いだかもしれませんが、長続きはしません。やむなく近くに安い借家を探して、そこで南湖と同じ空気が安静だけは確保して病気の好転を待ったのでしょう。そのような患者が

南湖付近には大勢いたと云います。南湖院の前は海でした。借家は少し離れていますが、海の声は聞こえました。

なみ

あの浪の音はいいなあ
浜へ行きたいなあ



同じ南湖園で過ごした画家
萬鉄五郎の絵 茅ヶ崎海岸

彼は熱烈な恋愛結婚でしたので、二人の子供を得て人一倍家族思いでした。

富子

神様の名を呼ばぬ時は
お前の名を呼んでいる

登美子

私は病気して
お前を母のように思っている

桃子と陽二

私はお前達を見ずにいるのが辛い
私はお前達の父であったことが
誰れの父であったよりも嬉しい

そして1年安静生活をしながら耳下腺炎・腹膜炎などを併発、遂に起き上ることのないまま昭和2年30歳で亡くなりました。残された家族の経済は壊滅的なものだったでしょう。このような詩があります。

桃子は、眼のふちがただれちゃったけれど
私の方へ金がかかるので
医者につれていけないのだって

彼の死後、妻の登美子は働きながら二人の子供を育て、彼らは美しく聡明に育ちましたが、15歳前後で二人とも父から受けた結核で早世しました。登美子はその後南湖院の事務員をしているときに、歌人で4人の子持ちで妻を失うという似た境遇の吉野秀雄に請われて再婚し、彼の協力を得て重吉の詩集を次々に世に出して長寿を全うしました。(八木重吉詩集 白鳳社などより)

1-2、重吉のキリスト信仰

重吉の詩はあちこちの詩碑に残されたもののような、澄んだ美しい詩の作家というイメージがありますが、実は、戦後彼が有名になったきっかけは信仰詩であって、キリスト教信徒の間に広く愛読されたのです。私も人生の半ばを過ぎてカトリックの洗礼をうけ、イエスの道を歩み続けたいと願っているものですから、重吉の信仰はどんなものだったのかに強い関心を引きました。

亡くなる頃の詩にこんなものもあります。

なにゆえ きりすとは くらきにときしか
木の実をみよ
土におちざればはえず つちにおつればくらきなり
またこんな詩があります。

怒れる耶蘇だ
おおいらいらしげに
歩んでいる耶蘇よ
私は辛い なぜ
凝っと私をみつめているのか
その瞳 (め) !
その瞳!
ふとたちどまって
ちらと私に投げるその凝視
何という寂しげな眼だ
なんといういきどおろしい瞳だ

総じて彼の信仰は、「厳しい」、そして「暗い」のです。明るさはないのです。私自身は信仰を得て人生が明るくなったので、まずこれは不思議でした。

それは八木重吉ばかりではありません。当時の日本の近代化の思想的背景として流入したキリスト教は、信仰というより、「罪」の意識を梃子にした人生規範を与えるものだったからでしょう。「罪」の意識、それは日本の思想になかっただけに、西欧近代思想の受容に欠かせない陰影のようなものでした。島崎藤村・芥川龍之介・志賀直哉など明治後半から大正にかけての作家の多くは、その影響を強く受けています。

現代のキリスト研究で明らかになっていることは、イエスは罪の怖れを説いたことはなく、逆に罪をとがめるユダヤ社会の中で、「罪人の友として来た」といい、ユダヤ社会が罪人としてさげすんだ貧しい人、小さくされている人の立場にたって、そのような人たちこそ私と共に天の国を作る人だと言ったのです。それは反逆の言葉であり行動でした。だから当時の支配者層によって迫害され、殺されてしまいました。

しかしその後キリスト教がローマの国宗となり、弱者の宗教から、支配者の宗教となったとき、「罪」は民衆支配のための強迫観念として復活しました。イエスの望まない方向へと行ってしまったのです。イエスに戻ろうとの運動が歴史の中で何度となく繰り返す中で、ルターの宗教改革が初めて成功し、プロテスタントが生まれました。カトリックを覆えそうとする運動は行き過ぎて、結果的にプロテスタントはユダヤ教帰りとなっていって、カトリック以上に戒律を重んじ、罪を強くとがめる暗い宗教になってしまいました。明治以降の日本宣教はプロテスタントが主力だったのでその傾向は強かったのです。重吉のキリスト詩が暗くきびしいのはそのためです。

さらにプロテスタント教団の一部に新たな展開がありました。第1次世界大戦やその後の不況の暗い世の中でそれを打ち破ってくれるキリストが近く再臨するという思想が生まれたのです。米国ではいまでも活動を広めるエホバの塔といわれる教団がそうですが、日本のキリスト教指導者である内村鑑三もキリスト再臨の待望に燃えたのです。それは道德規範としての受容から一挙に超越者信仰に近づいたということを意味します。内村鑑三の影響下にあった重吉も再臨の期待を詩にしています。

このよに
てんごくのきたる

その日までわがかなしみのうたはきえず
てんごくのまぼろしをかんずる
その日あるかぎり
わがよろこびの頌歌（うた）はきえず

超越者としてのキリスト信仰は次のような詩を生みました。

基督は

病める者を癒やしたもうた
信ずるゆえに癒やしたもうた
私がもし癒えないなら
私の信仰がうすいのである
私はただひとすじに基督を信仰しよう
かすかにではあるが
お前が全く信ずるときお前は癒る
こう言っておられる基督の姿と声がきこえる
基督が私を見ていて下さる以上
この病が一つの試みでない筈がない
基督が私を見ていて下さる以上
この病が信仰によって癒してもらえぬ筈がない
私は一生懸命に
この病を癒して下さると信じかつ祈る
基督が癒して下さると信じないこそ罪である

この詩から見えるものは、超越者にささげる信仰が、病の治癒を祈るという次元にとどまっているということです。イエスは、「私を信じるものは永遠の命を与える」といった死の克服を示唆しているメッセージを残していますが、それには目をとめません。若さの故に、死を拒絶し、死からの救いの信仰を深めませんでした。それは成熟とともにしか得られないものかもしれませんが。次の詩のように、彼の死に対する思いは、そのキリスト信仰にも関わらず、日本人的な仏教的なものに止まったのです。

まったいのものは
死のほかにはないだろう
なにもないがゆえ

いらいらしさもあるまい
みかけのよいつわりもあるまい
むなしいゆえ
こころはいっぱいひろがれるだろう

死を前にして、彼はキリストに救われたのでしょうか。もしこのような通俗的な問いをかけるなら、おそらく彼は信仰で、救われることはなかったし、逆に救いを求めてはいなかったといえるのではないのでしょうか。哀しいままでよかったのです。なぜならば、哀しみこそが彼の詩の源泉であったからです。

靈感 (れいかん) は こころの花
悲哀 (かなしさ) は こころの蒼空 (そら)

詩人とは かなしみのひと
詩こそは かなしきよろこび
世にあらざるは さいわいのうたびと

八木重吉の詩の美しさは、「詩こそは、かなしきよろこび」なのです。「蟲が鳴いている」や、「琴はずかに鳴りいだすだろう」これらは長く後世に残る作品です。ある意味で、信仰によって安易には救われなかったからこそ、生まれでた珠玉の悲しみの歌であり、長く人々に生きる勇気を与えてくれるものとなっています。

2、明治大正昭和にわたる結核菌との闘い

2-1 明治時代

結核はエジプトのミイラの骨にも発見されたといえますから、人類とは長い付き合いなのです。江戸時代まで、肺結核を癆瘵（ろうがい）、体に現れると「るいれき」とよび発病すればただ死を待つだけだったのです。いわば人は結核と戦うことなく受け入れたのです。

明治時代の幕開けに生まれ俳句という文芸を築いた正岡子規も、その5年

後に生まれた樋口一葉も結核によって短い一生を終えました。

「頭痛肩こり樋口一葉」（井上やすしの戯曲）のように樋口一葉の代名詞となった尋常でない頭痛・肩こりは彼女の 16 歳ごろから始まり、一生つきまといました。当時の名医とされた佐々木東洋が歌会の師匠を診てのついでに一葉も見て「これは内に回るといのちにかかわる」と言ったそうですから、私の推定ではこれは結核性ではないかと思います。文学的名声を得たのちも抜け出せなかった貧困のなかでは医師にかかる余裕もありませんでした。死の床に就いた時に森鷗外の手配で青山胤道医師が診たときは、すでに手の施しようがなく、結核と診断しただけで終わったのです。24 歳 明治 29 年のことでした。

正岡子規が喀血でその病に気がつくのは明治 22 年のこと帝大予科時代のことでした。青春まっただ中のことゆえ、また治療法もない中、病状が落ち着けば、無頓着な生活に戻り、野球や旅行そして詩作に励みます。周りの心配をおしきって明治 28 年に日清戦争の従軍記者として中国に行ったことで結核を悪化させてしまい、帰国の船上で大量の喀血をします。一旦松山に帰って静養し小康を得て、友人漱石と共に東京に戻る途中に奈良に立ち寄った時の句が有名です。

行く我にとどまる汝に秋二つ（漱石に別れる）

柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺

しかしそのまま病状は悪化し、翌年には脊椎に結核菌が周り込み、立てなくなって病床六尺の世界に閉ざされてしまうのです。しかし正岡子規の子規たらしめる大きな仕事はそのあとから生まれるのですから驚きです。

今年はと思うことなきにしもあらず

枕にす俳句分類秋の集

大部の「俳句分類」を完成させ、それを基礎にした俳句の革新論が病床から世に送り出されるのです。そして明治 35 年 9 月亡くなりました。35 歳でした。

痰一斗糸瓜の水も間にあわず

子規より 6 年後、同じように結核で 36 歳の生涯を閉じた国木田独歩は、結核患者は「その発熱とともに情熱の人となる」という俗説がもし本当ならば、それを地で行くような波乱の人生を送りました。熱心なキリスト教布教活動、はげしい恋愛と結婚そして破綻の繰り返し、政治運動、そして文筆活

動といった多彩な活動の末、末期で手の施しようもない身を茅ヶ崎の南湖院で終えました。明治41年のことです。小説「武蔵野」などで自然主義文学の旗頭として有名となっていましたのでその葬儀は、文壇関係者はむろん、当時の総理大臣の西園寺公望も代理人を送るほどの壮大なものだったと記録にあります。今茅ヶ崎のその地に独歩文学碑がたっています。

もう一人明治の結核患者の例をあげます。農民小説「土」の長塚節です。彼は東北出身でもあり、結核に苦しんだよしみで藤沢周平が小説「白き瓶」の中で彼の結核との闘いをリアルに描いています。

長塚は1879年（明治12年）生まれ。正岡子規に入門、漱石の知己を得て1911年朝日新聞に小説「土」を執筆。余りに地味な小説だったため人気はなかったのですが、農民を描いた初めての文学として今は高く評価されています。この執筆後、咳が止まらないことに異常を感じ、東京の医師に診てもらって、喉頭結核と診断され、このままでは余命1年半と宣告されます。1912年（明治45年）のことです。すでに結核の知見も少しづつ生まれてきた時代でしたので、あちこちに当時の名医といわれる医師がおられ、長塚は東京、京都、九州と全国の名医を訪ねてまわることになりました。まず漱石の主治医でもあった長与博士の紹介で根岸養生院の岡田和一郎博士から喉の奥の患部の軟骨を切り取る手術を受けました。京都帝大病院でも患部の切除、九大では患部の電気焼灼などを繰り返して、喉頭結核は完治と診断されるまでになるのですが、発熱などの症状は良くならないのです。喉頭にでた病変は見えるが、肺の疾患は見えないから手の施しようがないというのがこの当時の医学だったのです。

暖かいところに転地を勧められて、九州から四国に出向きますが、転地療法というものではなく、発熱する病の身を持ってあますかのように、せかされるように動き回る無理な旅行です。悲劇的な旅は宮崎の青島を訪れたときに起こります。折からの台風で宿にとどまった時、宿から肺病病みは他の客の迷惑だからと追い出されてしまうのです。そして旅に病んで1915年（大正4年）九州大学病院で逝去しました。37歳でした。

樋口一葉、正岡子規、長塚節の結核の特徴は、結核菌が肺は無論のことでしょうが、そこにとどまらず体の他のところまで侵し、そちらのほうで直接病人を苦しめるまでに至るのでした。そして当時の医学は外に現れた患部の対処療法でひと時患者を安心させましたが、その間に進行し命を奪う肺疾患

には無力だったのです。

2-2 大正時代

19世紀後半に入るとドイツ医学が結核との本格的な闘いの旗を揚げます。まず「大気、安静、栄養」の療養法を確立し実行に移します。サナトリウムの出現です。産業革命はどの都市も煤煙で空気は汚れました。「空」がなくなったと嘆いたのもこの頃です。肺の病気にはきれいな空気のある場所へと転地療法を医師は奨めるのですが、普通の人には行くべき適当な場所はありません。長塚節の旅がその悲しい例です。転地療法という治療法はサナトリウムという施設となって、はじめてきれいな空気、規律ある安静、栄養のある食事という一貫した治療システムとして実現したのです。

ドイツ医学を取り入れた日本の医師たちもこのサナトリウムを知りさっそく導入しました。漱石を診た長与専斎博士が作った鎌倉由比ガ浜の結核療養所「海浜院」が最初のもので、明治20年のことです。漱石の「こころ」の舞台となりました。トーマスマンの小説「魔の山」は、このころスイスの山岳地方に作られた国際サナトリウムを舞台にして、当時の結核患者の放埒な療養生活と治療法が生々しく描き出されています。肺の患部にガスを注入して圧縮する気胸療法や、生まれたばかりの物々しいレントゲン装置などがユーモラスに描かれています。主人公である二人のドイツ青年は、残念ながら治ることなく、第1次世界大戦とともに退院することになるのですが。

鎌倉に次いで、湘南の地がきれいな大気を提供する適地ということで、明治の名医の佐々木東洋は東京の杏雲堂病院の分院として明治29年平塚にサナトリウムを開設しました。またそのすぐ後、東京でも対抗していた東洋内科治療院の高田畊安は、より巨大なサナトリウム「南湖院」を茅ヶ崎村の漁村南湖に開きました。この対抗心は、高田畊安がドイツのベルツ教授に学んだ東大系、佐々木東洋は長崎のオランダの医師ポンペに学んだ蘭学医といったところから出ていたのかもしれませんが。畊安自身も結核に感染していたので天職と考えて南湖院の経営に当たりました。最盛期は茅ヶ崎駅前から海岸まで5万坪 12棟の病棟を中心に中には、看護婦の養成所、気候測候所洗濯工場まであるまさに東洋一のサナトリウムでした。



高田畊安は東京帝大時代に植村正久師のもとで洗礼を受けたクリスチャンですから、南湖院には医王堂というチャペルがあり、クリスマスを医王祭といって、内外の賓客と地元の人々を招いて盛大に祝ったといひます。見学者は引きもきらず、「月よりの使者」なる看護婦を主題にした映画もここで撮影されるなど、全国的な名所となったのです。「白衣の天使」という言葉もここで生まれました。南湖院に世話になった患者のうち文学者は、先の国木田独歩・八木重吉をはじめ、坪田譲治、吉井勇、画家の萬鉄五郎、また平塚雷鳥の姉が入院していた関係で雑誌「青鞥」の根拠地となったそうです。

南湖院が開院した明治 32 年から徐々に病舎数が増え、昭和 11 年に全体 12 棟が完成するまでに延べ約 10 万人の患者が罹りました。問題は金がかかることで、結核は贅沢病とも言われていました。南湖に入院するとどれくらいかかったでしょうか。まず高田畊安院長に診てもらいますと初診料が 5 円、再診ごとに五十銭、入院料は原則個室で一日 7 円から 3 円、健康保険はありませんので、この負担は大変なことです。資産家の子女でなければかかることのかなわぬものでした。明治大正時代の物価は、およそ 1 円を 1 万円と読み換えればいいです。(川原利也著「南湖院と高田畊安」より引用)

さかのぼって明治の長塚節の場合、3 人の名医にかかっていますが、その都度 10 円包んだと言っています。長塚家は借金だらけだったとはいえ父は県会議長をつとめた名門でした。骨董を売り、地方文学好きの名家から借金を重ねながらも金がつき果て、最後の九州帝大は官費入院でしのいだのです。

2-3 昭和時代

昭和にはいって結核との闘いはあらたな展開をします。三水会会長の村澤泉さんが小学二年のとき小児結核と診断され、一年間休学し安静と 1 日 4 個の生卵で復学できた頃からのことです。

贅沢病といわれ裕福な子女でなければサナトリウムには入ることが出来ないことを何とかしようとして、南湖院の副院長の林止医師は、クリスチャンとして伝道会を作り、貧しい患者を一日3名に限り診療を始めました。さらに結核予防団体「白十字会」に発展させ、七里が浜に恵風園結核隔離治療園を開設して1日40銭の費用で入院をさせたのです。残念ながらこれは地元の反対で閉鎖せざるを得なかったのですが、そのころは昭和16年、東京都下の東村山村に村山療養園という低廉な費用のサナトリウムを設立することで果たされます。次の章で取り上げる藤沢周平はここにお世話になるのです。

昭和の10年から30年という時期は結核にとって変化の激しい時期でした。結核菌が発見されたのは明治の半ばだったのですが、体長数ミクロンの結核菌は、消毒薬では死なない丈夫なバクテリアでした。その増殖を防ぐ化学物質が最初の抗生物質としてアメリカの大学で発見されたのが第2次大



戦末期のことでした。戦後これが輸入されてストマイ・パス・ヒドラジッドの化学療法がはじまったのです。日本では国民病と言われた結核に国を挙げて対処すべく、昭和26年結核予防法を制定、集団検診、予防接種など国家的にもバックアップするようにな

ったのです。

藤沢周平は1927年(昭和2年)生まれで、戦後の1949年22歳で山形師範を卒業し中学校の教職についたとき(1951年24歳)制定間もない集団検診で結核が発見されました。せつかくの教職を辞し、上京し先にふれた東村山のサナトリウム病院で右肺上葉切除します。彼の場合それでも好転せず、さらに2度の手術を受け、患部への空気を遮断する胸部成形で6本の肋骨を取ってようやく結核菌を押さえ込みました。

私も昭和32年就職して新しい生活を始めようとした矢先に結核にかかりました。23歳で東芝林間病院に入院しましたが、すでに保険適用になっていた3種の化学療法と肺葉区域切除をうけました。その後不運にも耐性菌感染による院内再発したのですが、当時発見された新抗生物質カナマイシンの試用により、1年半で退院できました。健康保険制度の恩恵で貧乏人の息子

でも親には何の負担も掛けずに済んだのです。

戦争と同じように、多くの若い人生を奪ってきた結核菌とのたたかいに劇的に勝利したのは、わずかこの数十年の間のことだったのです。

しかしこれには思いがけない次なる展開がありました。肺手術の時に必要だった輸血によるウイルス感染が時限爆弾のように 30 年後次々に発症したのです。ウイルスは細菌の 1000 分の 1 の大きさの、たんぱく質と遺伝子高分子からなる構造体で生物ともいえないが寄生して増殖します。肝臓の細胞に入り込み増殖、最後はガン化していきます。1988 年には肝硬変による死亡率が 5 位に上がってきました。

藤沢周平氏は術後 35 年の 1995 年 C 型肝炎を発症し 1997 年 1 月肝不全で逝去しました。私も術後 15 年の 1978 年に肝機能検査で異常が発見されました。当時、肝炎は治療法がなく漢方やゲルマニウム療法などで一時的には安定するのですが、ぶり返してさらに悪化するという道をたどっていました。幸いなことに免疫医学は、この 30 年の間に分子生物学へと進歩していました。輸血による肝炎の原因が C 型ウイルスであると同定されたのが 1988 年のことだったのです。生命の不思議とされる免疫のメカニズムも次々と解明され、その中で飛び交う情報伝達分子が数多く発見されました。その中でも不思議な作用持つものがインターフェロンだったのです。1992 年 C 型肝炎にインターフェロンが保険適用できることとなり、私はまたもその初っ端適用の幸運に恵まれました。6 か月の治療期間、初めは大腸菌に作らせたもの、3 ヶ月後に人間のリンパ球につくらせたものが試用されました。人型が劇的に効き、今は治癒しました。私は、生命科学のウェーブフロントに乗ることができて、命をいただいていると改めて認識しています。

3、そして勝ちえた人生 100 年をどう生きるか。

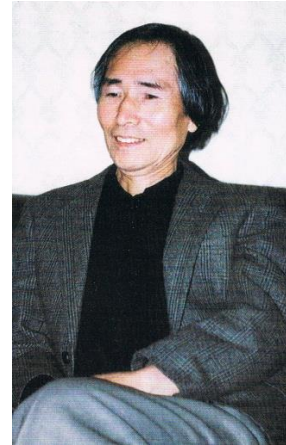
3-1 藤沢周平に見る円熟の人生

結核菌は成長が遅いのが特徴ですが、そのためにちょうど人間の青春ごろに活発になるのかもしれませんが、おそらく無菌状態の赤ちゃんを過ぎればすぐ母親から感染し、ほとんどの人は自己免疫を得ます。しかし都市生活が進み、人口の密集や、空気汚染、無理な労働による疲労などが激しくなると、

発病に至る人が増えてきたのです。明治時代から大正昭和の初期に結核は国民病といわれるほどになりました。しかし菌の生育が遅いこともあって、兆候は少年期から出るものの、これから活躍という人生の始まりの時に、病状が進み、数年で命を奪われるという特徴はほかの病気にはありません。結核と自覚した人は、不治の病であることを知り、そのため生を急ぎ、無理をして仕事をし、逆に結核菌の助けをしてしまい短い人生を終えてしまいます。無念さが残るのです。

しかしここにあげた方々は若くして才能を開花し、短い人生にも関わらず立派な仕事をしていきました。たとえ彼らにあと 30 年の人生を付加してもむしろそれは余計なことといった感すらあります。それではもし彼らに仮に生き延びて長寿が与えられたらどんな意味があったでしょうか。夭折した彼らからはおしはかるべくもありませんが、ここに一つの好例があります。それは若い時結核で一度は人生を失いながら、復帰して 70 近くまで生きた藤沢周平です。その円熟の人生からそれを学びたいと思います。

先に述べたように彼は 1957 年 6 年半の闘病で人生を一度ご破算とし、30 歳で退院、業界新聞に職を得て社会復帰します。結婚、子供もできやっと安定した家庭生活を始めた途端に妻をがんで失う不幸に見舞われます。このような事情で遅くからの作家生活を始めていますが、1971 年 44 歳でやっと新人賞を得ます。それは「溟い海」という作品です。年老いた浮世絵師の北斎が、最近売り出しの広重を嫉妬し、やくざに痛めつけるよう頼み、逆に自分が痛めつけられる話です。執拗に暗い海にたたずむ鶴を描く北斎が描かれます。さらに 46 歳で直木賞を得た「暗殺の年輪」や「闇の梯子」などの初期作品は、暗い情念にあふれています。周平の学生時代の友人蒲生芳郎の評伝から引用すると「藤沢周平の初期の小説は、いわゆる時代小説というよりは、近代の小説の本道にかなっている。この時期、「長い不運な歳月」の果てに、妻を死なせた、その若すぎる命を救えなかった藤沢周平の「鬱屈」はあまりに深かった。その胸底には、暗い情念が深い淵のように湛えられていた。とすれば、その時期に書かれた小説が一様に暗い小説になるのは必然だった。そしてその必然あればこそ、それらは時代小説にして時代小説を越える、純度の高い



文芸作品たり得ているのだ。」

それより5年ほどたった50歳ころ、作家自身が「転機の作物」と呼ぶ新たな作品群が生まれてきます。「用心棒日月抄」「橋ものがたり」など、ユーモアと癒しに満ちた作風になります。周平が自身の言葉で語る「転機」とは、「書くことだけを考えていた、つまり小説の中に、自己内心の「鬱屈」を吐露することばかり考えていた自分が、書いたものが読まれること、つまり読者の存在に気づいた」ことに由来するといいます。よるこんで読んでもらえるためには、「大衆小説のおもしろさの中の大切な要件である明るさと救い」が必要だということ、自覚したということです。暗殺剣シリーズとして数々の映画にもなって爆発的人気を博する作品はこのころのものです。

これらの作品は練達の時代小説家の職人芸ともいべきもので、それはそれとしてすばらしいのですが、私は周平氏自身にとって大切だった仕事は、地味で映画にはむかない一群の「伝記もの」だったのではないかと思います。先にあげた長塚節の伝記小説「白き瓶」もそうですが、新井白石の「市塵」、清川八郎の「回天の門」「一茶」などです。そして絶筆となるまで周平が2度にわたって取り組んだ「漆の実の実るころ」は山形藩の藩政改革の歴史小説ともいえるものですが、実際は上杉鷹山の伝記だといえます。周平の伝記小説は彼が何らかのつながりで深い思い入れのある人物がえらばれており、したがって執念を持って膨大な資料を集め調べたうえで筆を進めます。伝記とは言いながら、通常の伝記ではありません。史料に残る彼らの人生の点を頼りに、周平はその人物となって生きて見せるのです。彼らはいずれも何らかの無念を人生に残しています。周平はその無念を生き、その人の最後まで暖かく見届けてやるのです。彼はこれらの仕事を通して何人もの人生を生きたと言えるのではないかと思います。

そのような人生の長い時間をかけた仕事のあとで老年の円熟した作品に到達します。それらは「三屋清左衛門残日録」「蝉しぐれ」「日暮れ竹河岸」「漆の実の実るころ」などです。「蝉しぐれ」を私は周平作品をよく知らないときにTVドラマとしてみましたが、その美しさに感動したことを覚えています。ここにみられる人物たちは、まるで美しい日本画の中にいるようです。そして過去の自分の人生の過ちも微笑みをもって受け入れ、またせまり来る死とも和解しています。人生の最後に到達した自らへの赦しこそ、人への限りないやさしさの源泉であったのです。

3-2 結核菌との闘いの意味するもの

1月の三水会で岡本さんから経営哲学者ドラッカーの話をいただきましたが、そのとき日本で大成功している前川製作所の例がでました。その経営哲学が今西錦司氏の「生物の世界」だと教えていただきました。今回の結核菌と人類の戦いのことを報告するにあたり、その最終章はどうしてもこの今西氏の生物哲学で締めくくらなければならないと思いました。

今西理論の基本的な考えは、「生物と環境とが別々の存在でなくて、もとは一つのものから分化発展した、一つの体系に属している。すべての生物は棲み分け、お互いに意味のある存在である。」

「進化は種社会の分化による生物全体社会の成長である。まことにこの生物全体社会こそは、そこから我々人類社会も派生してきた偉大な母体であり、不滅の一大生物である。」

今西自然学を読んで、それはベルグソンの「創造と進化」の哲学を豊かに色づけしているものと考えました。今西錦司氏はベルグソンとは独立にこの自然学を確立されましたが、驚くほど共通しています。

今西自然学に従えば、結核菌を単に根絶すべき人類の敵と考えていたことは改めなければならないようです。結核菌はバクテリアの1種ですが、バクテリアという生物は、地球上のあらゆる生物の中で初期の生物として発生し、かつ最も地球上の広い所に分布して生きています。また他の生物にはない代謝作用で地球上の物質循環に寄与し、たとえば大気の形成など後のあらゆる生物が生きていける自然を形造ったのです。今もさまざまな発酵食品などで人間の食にも深く関係していることはご承知の通りです。

そのうち結核菌は幸か不幸か人間に寄生するという人間環境を選んだバクテリアです。長い歴史期間を経て、今の結核菌は人間の体内以外には住めないものとなっていますし、逆に結核菌を体内にもっていない人もほとんどいないといいますから、人類の誕生以来の長い、かつ、ただならぬ付き合いであるというわけです。(小学生の頃、ツベルクリン反応検査をして陰性ならば結核菌から作ったワクチンBCG注射をして免疫性を持たせるのですから、日本人は一応皆感染しているわけです。)

今西自然学に従えば、生物界のすべてがそれぞれの役割を持って存在するので、結核菌が体内で安定して平衡状況にあるとき、何かの穏やかな役割があるかもしれないと考えるのが自然です。経験的に言えることは、

結核患者に見られる特徴である精神の高揚、惚れっぽさ、成果に駆り立てられるような活動性は、結核菌の何かの代謝物質が関係しているのかもしれませんが。残念ながら結核菌について人間が研究したのはその抹殺研究だけで、ポジティブの生態研究はなされないようです。

結核菌が何かの状況で異常な増殖をすると、宿り主を結核患者にしてしまい、やがて死に至らしめると、そこで自分たちも死滅します。結核菌がそれを承知しているとは思えませんが、生物である限り生存本能から、そのような暴走状態は結核菌自身も避けたい状況でしょう。それは人間の正常細胞が暴発分裂すると起きるガンと似ています。

これからも結核菌の生態研究がされる可能性は低く、わからないままになりそうですが、少なくともその成長を抑えて暴発していかないように制御することできるようになったので、良い面は自然に人間に残されていると考えて満足したいと思います。

3-3 仮説

ここまで結核菌との闘いと、それぞれの人生にとっての意味を追いかけました。そこに見出すことは、この結核菌制圧の成功は単なる医学上のものにとどまらず、ベルグソンを学ぶ私にとってはこれから迎えるであろう人間種の飛躍の重要な一里塚であったのではないかと思えるのです。生物としての人間種と考えますと、結核菌をはじめ若い世代で死にいたるさまざまなバクテリアを制御できるようになって、人間種はやっと本来持っている寿命まで生を続けることができるようになったのです。

人間はその精神の成熟にはかなりの時間が必要です。それに必要な期間を生きることができるようになったということは、人間種の次の飛躍にしかるべき準備ができたことを意味します。というのは、人間種の次なる進歩は肉体的なものではなく、精神的な何かでしかありえないからです。

今西自然学ではこう述べています。「人間の次に世界を支配するものは何だろうか。恐らく人間の支配はまだまだつづくことだろうが、人間の発展にも限度があると考えられてよいと思う。しかし今の人間に代って立つべきものは…もはや人間と呼ばれるべきものでないかも知れぬが…今の人間の中に胚胎されていなければならぬ。今の人間の中からつくり出されねばならぬ。それが進化史の教えるところである。」

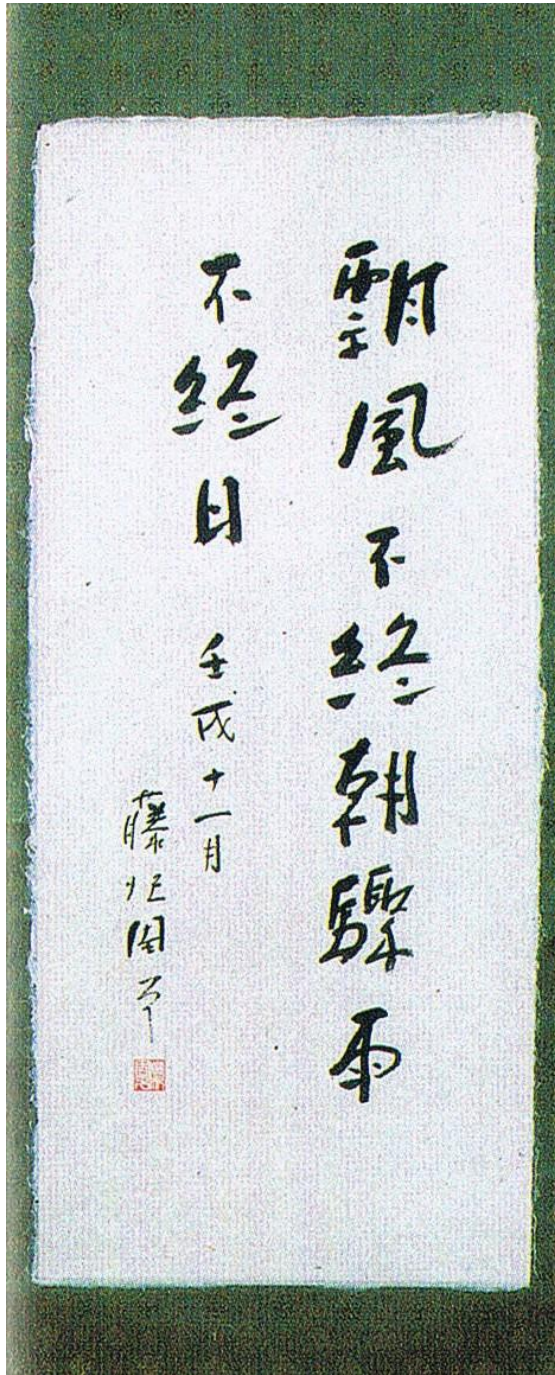
人間種は 200 万年の長い歴史の中で、3000 年前にはやっと農耕を知って食の安定という大進歩を遂げたのですが、逆にそれ以来人間種同士の争いの時代に入りました。争いや競争が人間の性とさえなったようですが、それに対して違う道のあることを教え始めた人が出ました。2000 年前のことです。愛と平和と赦し合い、譲り合い、共存の道です。その道を説く先達の人、その後もいろんな時代、いろんな場所で、増えてきたことに気付きます。先達者はイエスと呼ばれたユダヤ人、親鸞や尊徳など、何人も例をあげることができます。また彼ら先達の人に憧れ、共感するのも我々の内心に仕組まれているようです。それに従う人間も増えてきました。それは今ヒューマニズムとか地球意識といった言葉で表現され、マイナーなものではなくなりました。しかしそれは人間個々人についてのことで、人間が元来闘いや競争のために作った組織（大は国家にいたる）というものは、これらの呼びかけには鈍い反応しかしめていません。そして組織がもつ影響は大きく人間種の成熟を阻んでいます。熱狂的なナショナリズムが、円熟した人をもその人間性を変えてしまう例も多く見ました。（その点では先にあげた前川製作所は、組織体の精神的進化という点で画期的な意味をもっています。）

先達者たちが示した新しい人間精神が、組織を乗り越え、地球上の国境を超えて、また世代を超えてゆきわたる時、この世が天国とか神の国とか言えるような、これまでとは違った世界になるのでしょうか。

また個々の人間の成熟・円熟というのはまさにそのような世界に近づく精神の到達先を示すように思います。

日本は、目先の政治的混乱や経済の低迷で、お先真っ暗などといわれていますが、このような超長歴史的な視点から見れば、日本は他の地域に比べてずっと、平等で、自由、平和で、豊か、食に困らず、長寿と条件はそろっています。今若い人々が生み出す歌や演劇・映画など、今の芸術作品は惑星地球人としての共感を求める主題のものが多くに気がつきます。新人類の到達は案外日本人が一番先行しているのかもしれない気がします。

大げさといわれることを承知の上で、人生 100 年の時代に入った我々の人生の目的は何かと問えば、新人類の世界の到来をともに見守り、その仲間を見つけて共鳴し、支援し、その輪を広げることに加わっていくことではないでしょうか。それは人生の終わりまで続けることのできることです。



藤沢周平氏の遺墨（蒲生芳郎著 藤沢周平海坂藩の原郷より）

「瓢風不終朝 驟雨不終日」

ひょうふう 瓢風モ朝ヲ終エズ しゅうりゅう 驟雨モ日ヲ終エズ